

Title	はじめに
Author(s)	康, 仁徳小田川, 興
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, 第50号別冊 日・韓国際学術 シンポジウム「東アジアの平和と民主主義」特集号, 2011.3 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3165
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

はじめに

北朝鮮の核問題及び権力移行過程における政治体制のゆくえと経済困窮などの不安定要因が、東アジアに深刻な緊張要因をもたらしている。そのような状況のなか、問題解決に向けて価値観を共有する日本と韓国はどのような役割を果たすべきかについて、日本、韓国、米国の専門家が講演・報告、討論を行った。本書は、二〇一〇年九月一七日に「東アジアの平和と民主主義——北朝鮮問題と日韓の役割」をテーマに、ソウルの韓国プレスセンターの記者会見場で開催されたシンポジウムの予稿と記録をまとめたものである。なお、言語は日本語と韓国語であり、予稿は両国語に翻訳され、シンポジウムは同時通訳により実施された。極東問題研究所、尹洪錫責任研究員にはすべてにわたり、お世話いただいた。

このシンポジウムの開催時期は、同年三月の韓国哨戒艦沈没事件で南北朝鮮の厳しい対立が続ぎ、また北朝鮮の「三代世襲」を決定づけた労働党代表者会（九月二八日）の直前であったため、朝鮮半島情勢が国際的に極めて注目されるというタイミングであった。

本シンポジウムは、聖学院大学総合研究所日韓現代史研究センターと韓国の韓半島平和研究院、極東問題研究所という日韓の三つの研究所が協力して開いた。日本の東京倶楽部文化活動助成金、また文部科学省補助金、韓国統一省からの支援もいただき開催することができた。とくに玄仁澤統一省長

官はご多忙の中、シンポジウムに出席し挨拶をしてくださった。感謝を申し上げたい。

シンポジウムでは北朝鮮の核保有志向の背景や政治体制、経済状況を分析し、それを基に北朝鮮の核放棄に向けてその可能性と条件を探った。それと同時に、緊張緩和策の一環としての北朝鮮に対する人道支援の現状と課題、中国の支援が北朝鮮の政策に及ぼす影響を検証。日韓両国が地域安全保障の確立に向けて果たすべき役割など幅広い討論を展開した。

シンポジウムには日韓双方の政府関係者、朝鮮問題専門家、メディアをはじめ、二〇〇人を越える参加者があり、予想以上の成果を挙げることができた。

その後の朝鮮半島情勢は二〇一〇年一月、北朝鮮の韓国領延坪島砲撃という朝鮮戦争後初めての陸地攻撃を契機に、一時は南北朝鮮の全面対決機運さえ招いた。事態は黄海における米韓合同演習とそれに対する中国の牽制行動と、緊張の波紋を広げた。北朝鮮核問題解決を目指す六者協議の再開が難航するなかで、地域情勢の流動化も懸念されている。シンポジウムの総括で、朝鮮半島の平和達成のため日韓関係の緊密化を土台に、米国をバックに中国、そしてロシアも引き込むことで地域の安全保障するという新たな機構を構想してみるなど「中長期的な課題」の検討が提案された。

本書が、シンポジウムの目標とする東アジアの平和構築及び民主主義の実現に向けて問題解決の一里塚の役割を果たすことができれば幸いである。

聖学院大学総合研究所日韓現代史研究センター

康 仁 徳

小 田 川 興